新潟の水辺だより
niigata-mizubenokai report
Vol.71
●編集発行
特定非営利活動法人
新潟水辺の会
●発行日
2007年12月02日

report 01

NPO活動における心得
―「仕事」と「時間」の二通りの考え方について―

NPO法人新潟水辺の会 代表 大熊 孝

NPO法人・新潟水辺の会は、その前身の「新潟の水辺を考える会」の発足から、今年で20周年をむかえた。この9月22日にその記念シンポジウムを行ない、哲学者の内山節氏に「水辺の時間価値」という記念講演をしていただき、その後、内山氏・篠田昭新潟市長・大熊の3人で「記憶にのこる美しい水辺の創造に向けて」という鼎談を行なった。ここでの議論を踏まえながら、楽しくかつ世の中に役立つNPO活動のためには、われわれ個々人がどのような心がけあるいはスタンスであればよいのか考えて見たい。

まず、「水辺の会」発足当初に問題となったことは、われわれの「仕事」とNPO活動の両立問題であった。忙しい「仕事」を毎日やっとこなしているのに、なんで身銭を切ってまでNPO活動をするのか？その辺を明確にしないと、なんとなく活動しにくいという雰囲気があった。

この問題に関しては、7年目の記念シンポジウムでやはり内山氏に講演していただき、大きなヒントをもらった。内山氏は、「仕事」には「かせぎ」と「つとめ」の二種類があると言われたのである。「かせぎ」は、日々の糧を得るための、個人の利益のための仕事である。「つとめ」は人や世の中のためになる仕事であり、社会的動物である人間はこうした仕事をして生きがいという充足感を得るというのであった。資本主義的な市場経済社会になる前は、百姓であれ職人であれ「仕事」をすれば、それがそのまま「かせぎ」であり、「つとめ」になっていた。しかし、市場経済社会の中ではそれが分離して、意識しなければ「かせぎ」だけに陥っているというのである。人間が十全なる人生を送るには、「かせぎ」だけでなく「つとめ」も必要であり、いまのような市場経済優先の社会では意識して「つとめ」を行なうことが大切であり、それがNPO活動に通じるのだということであった。この「仕事」の仕分けによって、NPO活動なるものが位置付けやすくなったといえる。これは個人だけでなく、大学や会社のような組織にも当てはまることでないかと考えている。

今回の20周年記念シンポジウムで問題となったのは、「時間」をどのように考えたらいいかということであった。「光陰矢のごとし」で、絶えず自分の前から過ぎ去って行く時間しかなく、何も記憶に残らないまま人生を朽ち果てていいのか、という問題である。これについて、内山氏は、「時間」にも二種類あって、「直線的時間」と「関係的時間」(あるいは「循環的時間」)に分けられるというのである。明治時代以降、われわれの生活は「時計」という客観的時間に合わせ、効率的な成長ばかりに気をとられ、一方向のみの時間の中で過ごしてきた。しかし、本来の人間は、自然の循環の中で生活・生産し、祖先から子孫へ継承しながら、関係的時間の中で何世代にもわたる持続性を確保してきたというのである。「時間」にもこの二つがあり、そのことを念頭にNPO活動すればいいというのである。

確かに、「かせぎ」の世界では、24時間空港が必要になり、24時間取引が行なわれ、世界基準の直線的に流れる時間に身を置く以外にない。しかし、「つとめ」の世界では、地域にあった関係的時間、自然の生命とともにある循環的時間の中で、「記憶」を刻みながら、子孫への継承をはかることが必要なのかもしれない。

今後とも、NPO活動を楽しむ心得として、「かせぎ」と「つとめ」、「直線的時間」と「関係的時間」を意識しながら、地域とかかわり、循環する生命を大切にして、自分自身の記憶にのこる「つとめ」をしていきたいと考えている。

(なお、上記の内山節氏の言説は、大熊の解釈による要約であり、文責は大熊にある。)

■水辺レポート

report 02

新潟水辺の会 20 周年記念シンポジウム記念講演
「水辺の時間価値」　哲学者　内山　節 氏

■変化する市民活動

新潟水辺の会の大熊代表から要望いただいたテーマは「水辺の時間価値」という恐ろしく難しいテーマです。このテーマとどう関連するのかわかりませんけども、最近の私の考えていることなどを、ざっくばらんにお話させていただきます。

先ほどの報告をうかがって、私達の市民運動というのか住民運動というのか、どういった名前を使ってもいいと思いますけれども、やはり以前と比べるとずいぶん変わってきたという気がします。

一番大きな変化は、以前は「行政に要求を出したり、責任を追及したりしておしまいと」いう形の運動が普通だったような気がします。
最近ではむしろ「自分達で新しいものを創造していくと」という大きな方向変換をしてきたような気がします。

特に河川の問題について、批判すべきは批判しなければいけません。しかし、私達の仕事は行政を批判するだけでなく、それで終わってしまいがちな活動を住民が積極的に自分達で川を再創造する運動へと切り替えていく時代になったと思っています。そういう点では、この水辺の会が全国へ果たしてきた役割は大変大きなものだと思います。

■管理された自由の中で生きる私達

そのことと関連するかどうかわかりませんが、最近考えているのは、「以前の社会と比べて、今私達はかなり自由な社会に暮らしている」といえるでしょう。

もちろんこれは何の問題もなくなっているという意味ではありません。まだまだ解決しなければならないことはたくさんあります。

少なくとも、今ここでどんな発言をしようが、どんな出版物を出そうが、その場で逮捕されるようなことはありません。そういう点では過去と比べて、私達はかなり自由な社会に生きているといえるでしょう。

にもかかわらず、私達に自由な解放感があるかと問われますと、そうでもないのです。

内山　節氏（写真：安田　幸弘）

制度としてはかなり色々なことが昔よりも認められているはずなのに、私達自身が日々感じていることは、時には管理されているという気持ちも抱くし、何かに縛られているというそういう感じも抱かざるを得ません。

つまり、解放感のなさみたいなものがあります。そのことと、反対ではあるはずの自由と、開放感のなさにどういう問題が発生しているのかということを最近よく考えます。

そのことを考えてまいりますと、どうもその原因は私達には「何をしてもいいよ」といわれていながら、その何かをしようとするときの「手段がしっかり管理されている」というところに行き着いてしまうように思います。

実際に河川の問題を考えていくと、全くそのとおりだと感じます。私達は川に対していろんなことを主張したり行動したりすることはできます。

しかし、河川管理という話になってくると、その主体が国土交通省や都道府県などの行政に抑えられています。しかもそこで使われる手段 (= 土木技術) が全国同じような手段が用いられています。

手段がここまで統制されてしまった状況で、私達にいい川が戻ってくることは可能ですが、どこかで制約を受けてしまうという問題が発生してしまうでしょう。

report 02

新潟水辺の会 20 周年記念シンポジウム記念講演
「水辺の時間価値」　哲学者 内山 節 氏（2）

冒頭に「今私達は結構自由な社会に生きている」と言いました。これは「人間をかなり自由な状態にしておいてもいいのではないか」ということを国や社会が認めるようになったと言い換えてもいいでしょう。その最大の理由には、「自由にしておいても管理できる」ということに自信を持ったからではないかという気がします。

では、なぜ管理できるのか。これはいくつかの要因があります。その一つは 50 年くらい前からよく言われてきたことなのですけど、人間の欲望をコントロールできるということを 20 世紀の社会が獲得したことです。

例えばたくさんのコマーシャルを流すとか、映画を作って人々をある方向に導くなどということを間接的に行っています。これによって人間自身が自発的に欲望を抱いているのに、その欲望は実は自発的ではなかったりすることが起きているように思います。

欲望は常に外から刺激を与えられて発生していきます。自分では自発的だと思っているけれども、実は社会全体としては非常に巧妙に管理ができるのです。この仕組みを 20 世紀の社会は作り出すことができたと思います。

そのときに大きな役割を果たしたのは、マスメディアで特に広告という媒体でした。さらに映画など色々なものがその脇役を果たしていきます。

それらが人間たちを野放しにしても、人間の欲望は社会的にコントロール可能となったのではないかと思っています。

■管理によって得られた便利さ

しかし、それだけが全てだったわけではありません。もう一つ非常に重要な問題として、私達の社会は「手段を管理されている」ということが浮かび上がってきます。

今、市民活動をしようとすると、もはや欠かせない手段があります。

インターネットがまさにそうだといえるでしょう。それにより非常に安い料金で、たくさんの会員に一斉に同じ連絡を瞬時に送れるようになり、遠くの人々との間でも非常に簡単にメールでやり取りができるようになりました。あるいはホームページをつくることによって自分達の活動を絶えず様々な人に見てもらうことができるようになりました。インターネットが非常に色々な便利さを提供したことは間違いありません。

しかし、結局ここにも私達が振り返って考えなければいけない問題があります。確かに使えるものは使っていかなければ私達の運動は持続できませんから、インターネットの利用を否定しようとは思いません。だけど、「世界的に管理された通信システムというものを媒介にしないと、小さな地域活動さえ実現できない時代」とはいったい何なのだろうなというのを頭の片隅に置いてもいいように思えます。

実際、以前と比べると、私達が本当に何かやろうとしたときにまずパソコンというものが必要の手段になります。そしてさらにインターネットという手段が必要になるという形で手段を管理されながら生きています。

そこには常に便利さがあるわけですから、それを否定しようとは思いません。しかしそういうことを介していくうちに、なんとなく人間たちをある方向にどこかで管理できる仕組みが発生しているのが現在なのではないかと考えます。

私の知人に情報工学で著名な西垣通さんという東大の先生がいらっしゃいます。西垣さんはかつて日立製作所にいらっしゃって、コンピューター言語の開発が専門です。

コンピューターの言語を使った開発や日常の使用まで、今パソコンを使う方の大半が Windows という OS(基本ソフト) を使っています。

ちょっと前に日本で国産の OS を作ろうと様々な開発が進められた時期がありました。西垣さんはそのときの国家プロジェクトの一員でもありました。その西垣さんは今次の様なことを主張しています。

それは、「コンピューター言語というのは何語で

■水辺レポート

report 02

新潟水辺の会 20 周年記念シンポジウム記念講演
「水辺の時間価値」　哲学者　内山　節 氏（3）

もない普遍言語で書かれている。その普遍言語を各国語に翻訳する形で Windows の日本版のようなものが出来る。この世界共通の普遍言語で物事を表現することには無理があり、その言語体系を使って活動していくと世界的な統制が可能になっていく」ということです。

この問題はもう避けられないと彼は言っています。ですからコンピューター文化に未来はないというのは彼の考え方でもあります。

もしも人間の色々な創造的な活動に有効なコンピューターを開発しようとするならば、コンピューター言語をローカル言語化するというのが一番いいというのが彼の意見であります。

例えば秋田弁でしか動かないパソコンとか、津軽弁でしか動かないパソコンとか、そういう形でローカル言語化していくと、自分達の精神的や肉体的なトラブルを起こさないパソコンに近づいていきます。

しかし、それをやってしまうとコンピューターの自己否定になってしまいます。管理された普遍言語が使われているから世界のどこからでも情報のやりとりができるというインターネットの利便性というのが失われてしまいます。

しかし、それとずっと付き合っていくことによって、人間自身が持ってきた地域ごとの文化や、その文化とつながった自分達の体や心などが次第に変形していきます。変形はしていくけれどもそれが見えない。そういう問題がコンピューター社会にあるということを、日本でのコンピューター言語の開発の第一人者だった彼自身が問題提起をしています。

私はコンピューターの問題については西垣さんの受け売りぐらいしかできません。ですが、確かに、私達の使える手段は自分達のものになっていない。自分達で創造した手段になっていないのです。

■管理と創造との折り合い

先ほどの報告をうかがっていて、やはり水辺の会とそこに集まる方々が素晴らしいと思うのは、自分達で手段を創造し、それが様々な形で生まれていることです。

例えば通船川にも自分達で筏や船を作るとか、子どもたちを呼んでくるとか、川を自分達のものにしていく手段を自分達で創造していく。そこにこそこの活動はなかなか面白いなと思ったところです。

ですので、自分達で創造する手段と、自分達のものにできない手段とをどの様に折り合いをつけていくのかを考えていかなければいけない時代なのだと感じています。

■人々が作ってきたローカルな時間

実際に、私達の時間という問題を考えてまいりますと、今の社会というのは「時間が全員に共通した手段」になってきたという気がしてなりません。

つまり、かつては地域や仕事によって色々な時間の世界があったと思います。

例えば、私自身は信濃川の源流の川上村から山を越えたところにある、利根川流域の源流のひとつ、群馬県の上野村という村に半分くらい暮らしています。もともと私は上野村の出身ではないのですが、魚釣りに上野村にいってなんとなく気に入ってしまったので、できるだけ上野村で生活をしようとしています。

やはり村にいってみると、昔は村特有の時間世界がたくさんあったような気がします。

例えば赤ん坊が産まれて、次第に大人になっていく。その過程というのはどんな時間だったのだろうかと考えていくと、1960 年代ぐらいまでの村の子どもたちというのは、絶えず村という世界のなかで、子どもを育てていくという仕組みの中にあった。

具体的には、ある若い男女が結婚する。子ども

report 02

新潟水辺の会 20 周年記念シンポジウム記念講演
「水辺の時間価値」　哲学者 内山 節 氏（4）

が欲しい。するとうちのほうでよく行われていたのは、村の神様に子どもを授けてくれるように頼みに行く。

地域によって色々な習慣があって、行って手を合わせて帰ってくるだけっていうところもありますし、それから子どもが欲しい夫婦がお堂の中で一晩泊まるというのもありますし、それから集落の人達が一緒に頼みに行くという地域もあります。その様にして村の神様にお願いに行きます。

そして、いよいよ子どもができたということになりますと、神様に御礼を言ってそして村の人たちに報告する。

そうやって子どもが産まれるわけです。産まれた後もずっとその子どもが大きくなっていくまで、色々な行事が繰り返し行われる中で育てられていく。その行事を今は通過儀礼って言う言葉で一般に呼びます。

私がいる上野村の隣、山を越えて埼玉側に吉田町という町があります。吉田町では昔から「龍勢」という竹に火薬をつめて打ち上げるというお祭りがあります。そろそろその時期ではないかと思います。

地域の若者組が自分達のロケットを作ってきてそこで競い合う。そこで先輩からいろんなことを教わりながらロケットを作って打ち上げます。

それが最終的な青年時代の卒業式みたいな感じで、これから大人というかたちになっていきます。

ですから産まれる前から二十歳ぐらいになるまでの間、村の時間の中で育っていくのです。大人になるために必要なことを家からも教わるけれども、地域社会から教わっていきます。

そして一番重要なのは、絶えず地域の先輩が地域の後輩に教えていくことです。そうしながら村の時間を引き継ぎながら教えていくのです。

そういう仕組みが 1960 年代くらいまでにはまだあのあたりの地域には結構残っていました。残念ながら現在では、そのなかのほんのいくつかのものだけが、イベントとして残るだけになりました。龍勢もその一つで、今でも若者組でやっていますけれども、途中でとぎれてしまい続かない感じになってきています。

これは秩父地方の山の中のひとつの形ですけれども、自分達の地域の時間をどう創造り、その時間をどうやって伝承していくのかという仕組みの中で産まれた子どもが一歩一歩大きくなっていきます。

かつて行われていたものの中で、赤ん坊が産まれてまだ目が開いてないくらいの三日目に子どもが初めて家の外に出る日というものがあります。

それはお母さんがまだ伏せていますので、おばあさんにあたる人が抱いて家の外にでるわけです。それで何をしに出るかというと、厠の神様に挨拶に行くということなのです。

厠に神様がいるというのは、今の私達には分からない言い伝えですが、以前は厠には必ず厠の神様がいると言われていたのです。

その厠の神様に産まれた子どもを見せに行く日というのが三日目で、そのときに犬にあやかって元気で強い子どもに育つようにと額に墨で犬と書きます。

農山村の昔の家では、厠は外外に物置みたいな感じで作ってあるのが普通でした。自分の家の厠に挨拶にいくのではなく、両隣の家の厠に挨拶にいく。具体的には厠にいって、外から扉を開けてお米を一掴み分ほど和紙にくるんでそこに置き、厠の神様に産まれた子どもを見せるという儀式です。

この儀式は子どもが初めて外に出る日になります。でもどうしてそんな習わしがあり、どうして厠の神様なのかというのがよくわかりません。

現代的あるいは環境理論的にそこに循環の始まりがあるからだろうとかいう解釈をすることは簡単なのですけど、ほんとに昔の人がそんなことを考えていたのかどうかはよくわかりません。

とにかくそうやって、自分達の生きる世界とは何かというのをきちんと伝えながらそこの時間の

■水辺レポート

report 02

新潟水辺の会 20 周年記念シンポジウム記念講演
「水辺の時間価値」　哲学者 内山 節 氏（5）

世界があったのです。

■時間すら管理されてしまった私達

今の私達を考えると、その様な時間ではなくなってきて、まさに「時計を見ながら今日のスケジュールは・・・」という様な感じで誰もが生きるようになってきています。

ある程度の経済規模を持つ社会では、世界中の人たちが同じような形の時間を持つようになってきています。

これは、時間というものが自分達の生きる世界の内側であったものから、自分の外にあるものに変わってしまったからでしょう。自分から離脱した、あるいは客観的になった時間というのは「どこかで誰かに管理されて」その様な形になってきたのだと思います。

だから、人間が生きていく過程の中で非常に大きな要素である「時間」という問題を見てみましょう。その時間が世界共通の時間として管理されている。そして、その時間を消費しながら私達は良いも悪いも生きて行かざるを得ません。

今日は、私は群馬県から車で来たのですけれども、そうなると当然ながら遅刻しないようにしなければいけないということになり、たえず車の中で時計を見ながら動くのが当然となってしまいます。

結局そういうことを繰り返していくうちに「私達の何かが変わってしまっている」のではないか、「どこかで見ておかないといけない」のではないかという気になっていきます。
もちろんこの様なことは、すぐに「どうしたらよいのか」という回答が見つかるわけではありません。

私達は今、「自由に何かをやっていいのだという社会」に生きていながら、時計で管理された時間のなかで、すこし自由が利くだけの生き方をしています。

まして、仕事をするようになると月曜から金曜までは自分だけで勝手に決められない時間が相当たくさん出てきます。こうなると決して自分の自由にはならない時間というのがあることは間違いありません。

仮にそれがすべて自分の自由になる時間、24 時間自分の自由というそういう生活ができる人がいたとしても、そこで自分が使おうとする時間自体が、どこかで世界的な規模で管理された時間というこの時間から抜け出すことができないということのような気がします。

そうすると、そういう世界の中に身をおいているときに、果たして人間はほんとに意味で自由になりうるのだろうかと考えてみてもいいような気がします。

■小さな川が育んだ世田谷の歴史

私自身の生まれは東京の世田谷区でした。昔、世田谷は江戸からはかなり離れていて、世田谷村でした。そういう地域はかつて大変美しかったらしく、武蔵野台地にはたくさんの小川が流れていました。

うちのほうでも子どもの頃には、子どもでも飛び越えられるくらいの小さな小川がそこら中にありました。そこに小さな魚がいたりして、夏になると蛍がでてきて、うちの庭くらいまでたまに飛んでくるというそういう景色です。

その川の水源の多くは湧き水でできた池なのですけれども、お寺の池がたくさん多かったです。そういうところからでてきた湧き水がそこに小さな池をつくって、そこを出発点としてそこに細い流れができてきます。

そういう川しかありませんから、家のあたりの農業は畑作が中心の地域でもありました。そして、そういう細い水の流れを集めてそれなりの大きさ川になっていきます。信濃川なんかと比べれば比較するのもはばかられますが、うちのほうでは大川と呼んでいました。

地域社会の中で細い川が徐々に大きな川になりながら東京湾にむかって流れを形成していくというそういう地域です。

report 02

新潟水辺の会 20 周年記念シンポジウム記念講演
「水辺の時間価値」　哲学者 内山 節 氏（6）

その川は細い流れなのにずいぶん色々な表情を持っていました。小さい川ですから雨がたくさん降るとあっという間に増水する。増水をしてもたいした影響はない位のはなしです。くぼ地のそこを細く流れているだけですから、そこの水位が 1m 上がっても洪水が起きたという話ではないのですが、やはりそうすると大きな川の表情が変わっていくものなのです。

■人々の欲求で姿を消す川

ただそういう形であった色々な川が 1950 年代の後半くらいから様子が変わっていきました。　東京の場合、まず川がなくなっていきました。最初の理由は、戦後の東京の復興の過程で爆撃によって大量に発生した瓦礫を川に放り込んで埋めてしまい、そこの上に道を作ることでした。　その様な過程でやや太いくらいの川が沢山戦後の復興の過程で、東京大空襲の処理という形で使われていきました。

それが過ぎて、1950 年代年の後半あたりになると、今度は新しい住宅地ができたりしながら、色々な形で河川の形が変わっていきます。

ものすごく細かった川がただの U 字溝に変わっていきました。つまりただのドブになってしまいました。

ただのドブだけれども、そこにはきれいな水が流れていてたまに魚が泳いでいるのを子どもがみつけるなどしていました。魚たちもかなり苦労をして生き延びたのだろうという気がします。

つまり小さな川はその様に変わり、やや大きかった川もまた変わっていきます。その様にして行われていくと、今度は洪水が起きるようになってきました。

狩野川台風や伊勢湾台風のとき、近所の家が初めて水没してしまう事件ありました。僕のうちは高台なのでなんの影響もなく、小学生だったので僕自身は大変うれしくて、洪水を起こしたところを喜んで走り回って見に行ったりしました。そこの子どもたちが学校に行けなくなり学校が臨時休校になって、それもとてもうれしかったという記憶があります。

つまり、川が氾濫を起こしたことによって、僕たちにとって今までにない非日常的な、子どもにとってはお祭りにも似たような時間が発生していました。

その結果はどうなってしまったかというと、当時はまだ自然を守るとか、川を守るなんていう話のない時代ですから、それこそこういう状態にしておいたのは行政の責任であるということになりました。

早く埋め立てるべきだという住民たちは署名をして、行政に要求するということになりまして、それから十年ほど経ちますと、その氾濫を起こした川は暗渠となり、川としての姿形が一切なくなってしまいました。

■川の時間をたどってみる

その氾濫を起こした川が今どうなっているのか一度見に行ってみようとあるときに思い、十年くらい前に、昔川があったはずの場所をずっと歩いてみました。

もとの川の部分は蓋がされて道というか、遊歩道に変わっているのですけれど、ところどころコンクリートの三面張りのですが、蓋がされていない場所がたまに出てきます。

そういう場所で見ていると一箇所だけ鳥などが集まっている場所があって、そこの一番水がきれいなのです。そこは横に汚水処理場があって、汚水処理場からの処理水が流れ込んでいる場所です。三面張りの川ですけれども、鳥が水を飲みにきたりして不思議な光景にも感じました。

水源であるお寺の池はちゃんと健在でした。そこには依然として水が湧水としてでてきているのですけれども、お寺を過ぎるとそのまま地下の奥、見えないところに流れ込んでいくという様子になっています。

その景色を見ていて思ったのは、「川と共にあった私達の時間」とは何だったのだろうかというこ

■水辺レポート

report 02

新潟水辺の会 20 周年記念シンポジウム記念講演
「水辺の時間価値」　哲学者 内山 節 氏（7）

とです。

私の自分の子どもの気持ちとしては、その川が氾濫を起こして、お祭り気分の楽しい時間として感じられました。

しかし、水没した家からすれば、とんでもない話だったかもしれません。

もともとそこにあった川は、細い流れがたくさんあり、それがやや大きな川にはなったとしても、洪水を起こすような川ではなく、稲作ができるほどではないが農業用水などにも使われていたという場所でした。

昔、小学校のころですと、夕方そういう所を歩いていると、まだ農家がたくさんありました。川では農家の人が大根を洗っていたり、お米をといでいたりという光景を目にすることができました。

その様に農村社会の中で、川が流れている、細い川の時間というものがあって、それと結びつく形で地域の人たちが大根を洗っていたり、ご飯を研いでいたりしていました。

その周辺に住んでいる人たちには、そういう川を見ながら、時には夏に飛んでくる蛍を楽しむなど、川とともにある武蔵野台地という世界がありました。そこに川の時間があったような気がするのです。

■時間を持たない住民の要求

ところが、その水辺の時間がだんだん無くなり私達の世界から目に見えなくなっていった時に起きたのが、先ほど言った私達にとっては二つの大きな洪水でした。

そして、それはさらに大きな川の消滅を要求する運動へと変わっていき、1960 年代の前半に実現してしまった。

今になってみると、全ての川が地域社会から消えてしまったわけですから、なんてことをしてしまっただろうという気がします。

その後で世田谷区の方でも色々な自然を守ろうとか環境を守ろうとかいう運動は発生してくるのですけれども、なんとなく不信感を持って見ていた記憶があります。

それは何故かと言いますと、1960 年代前半に早く埋めてくれと言った人達が、そのことについてまずかったという反省をなしに、今度は環境を守るという話に展開していく様子を地元は見てきたのです。

そうすると気持ちの中に一緒に頑張ろうという気持ちが起きない何かを感じたりもしました。
ですので、元からあった水辺の時間が失われていく過程でうちの方では前代未聞の被害が発生し、最終的には水辺の時間が無くなっていきます。

そして川の無い町というのが出現をしていくというのが、私の育った町世田谷の歴史でもありました。

■農民が作ってきた水辺の時間

川の時間というものを考えて行く時に、「あれは一体誰のための時間だったのだろうか」という気持ちになってきます。

私自身は地元の農家の出身ではなく、そこに出来た住宅地の人間でした。

その住宅地の人間たちの川もありましたが、元々はそうではなくて、そこに暮らしたお百姓さんたちと共にずっと続いてきた川でした。

そのお百姓さんたちがその細い流れをつなぎながら、自分達に使いやすいように変えていったのです。

先ほどその色々な川を集めて大きな川になった川を「大川」と呼んでいました。その川も実は堀 (= 農業用水路) でした。そこら辺に流れてくる細い川を農民達が全部そこに集めて作り上げていった川です。

その川に一部多摩川上水からまた導水路を掘ってきて、そしてそこに水を追加することで足りない水を多少補うということもしていました。だから昔の世田谷区の地図には、多摩川上水から真っ

report 02

新潟水辺の会 20 周年記念シンポジウム記念講演
「水辺の時間価値」　哲学者 内山 節 氏（8）

直ぐになっている川というのが所々にあるのです。それはもちろん天然の川ではなくて、農家が作った川なのです。

そういう天然の細い川と農家が作った川を組み合わせながら、そこに地域の水辺の時間を作り出し、農村社会の時間を作り出して生きてきました。

■時間を共有できずになくなってしまった川

そこに、私達のような住宅地の人間という農家の作った時間を共有しない人間達が現れてきました。

するとその人間たちにとってみると、それは農業とともにある時間ではなく、自分達の近くを流れている子どもの遊び場のようなものにしかとらえられなくなってしまいます。

そこで遊んでいて亡くなった子どもが出てきます。亡くなった子どもが出てくるとたちまち危険だからなんとかしてくれ、蓋をしてくれという話が出てくるなど、色々な当時の市民の要求が出てきます。

そういうことを繰り返しながら結局川をまくしてしまったのです。

世田谷区という地域が農村社会であった間は、まさにその川というものは丸ごと農民達が作り、彼らの持ち物でした。だから、川というものが自分達の生きていく過程の中で作り出された手段でもありました。

そうやって生きてきたところに、川を単なる自分達の外の対象としてみる住宅地の人間が現れて、ある人は遊び場として楽しんだけれども、別の人からすると邪魔なものや危険なものと言われるようになります。

そうしながら農民達が作ってきた川が一本一本潰されて、それをやっていくうちに遂に洪水が起きてしまうのでした。

そうするとまた住民たちの要求が発生して、ついに消えていくという歴史だったという気がします。

■川を作ってきたのは誰なのか

やはり私達自身は、絶えずこの様な問題をどこかで反省しながら捉えなおすという作業をしていかなければいけないのではないかという気がしています。

確かに信濃川という川は新潟市に入ってくれば、農村の川では無くて、都市の中を流れていく川として日本海に注いでいます。

もともと信濃川は一体誰が作ったのだろうかということを考えていくと、自然の川という側面と、人間が作った川という側面の調和の中に信濃川の歴史というものがあったとことは間違いない。

そうするとその人たちは一体誰だったのだろうか。やはり信濃川とともに生きたこの地域のかつての農民達ではないかと感じます。

かつての農民達は、様々なことをしながら湿地に流路を確定しながら水田化するなど様々なことをしながら、まさに自分達が生きる世界の手段としての川を作っていきます。

そこに川に時間、地域の時間が生まれるのです。

今度それをつぶす形でここに大きな都市が生まれてきます。生まれてしまったものは文句を言ってもしょうがないので、次を考えればいいわけです。

しかし、そういう形で生まれた都市の中で、私達がもう一度川を自分達のものにしていこうということを考えるときに、「元々その川というものが何だったのだろうか」ということを絶えず振り返っていかないといけません。

■私達の川を取り戻すために

川というものが今の形で管理されていくその手段をどこかで握られているという構図の中に私達は自分の身も置いてしまっています。結局そこのところに依存しないと私達の川の再生運動も成り立たなくなっていきます。

この様なことを私は否定している訳ではないの

■水辺レポート

report 09

新潟水辺の会 20 周年記念シンポジウム記念講演
「水辺の時間価値」　哲学者　内山　節 氏（9）

です。すべての問題というのはきれいにすっきりするわけではないのです。川を管理している手段には絶えず矛盾が内蔵されていると思っています。

今の河川管理の手段をもってしても出来ることはあるわけですから、私達は自分達の出来ることをやり、ときには国も自治体もやってくれるように要求する。

ですが、もう一つ絶えず考えなければいけないことは、「私達それで本当に良かったのかどうか」ということです。「本当の水辺の時間というのはどうであっただろうか」という問いかけをしていく必要があります。

つまり、地域の人たちが生きるための手段として持っていたあの川はなんだったのだろうかということを絶えず振り返りながら、都市の中をも流れる川のあり方を見ていかないと、私達が何かに巻き込まれてしまうという気がします。

ですので、川の時間や水辺の時間をこれからどうやって自分達の手にしていくのかということを考えたときに、求められることは「何でも自由にやってもいいはずなのに、見えない形で手段が管理されている社会の怖さ」をやはり絶えず頭に入れておかないと本当の水辺の時間は戻ってこないのではないかと思っています。

そしてその全ての手段が管理されている社会を作ってしまったのは、私達自身でもあったのです。

そこのところをどう解決するかというのは別問題にしても、そのことによって地域の農民たちが持っていた手段を奪ったのも、私達自身であるということを絶えず頭の片隅に置いておくことが大切なのです。

しかし、今日の手段で出来ることはやるということは必要な気がしています。

■矛盾から生み出される水辺の時間

今日のテーマは水辺の時間価値ですが、それを取り戻すことはすごく簡単に解決策が出来る問題ではないだろうと思います。

私達が絶えず色々な問題点や矛盾点に気付きながら悪戦苦闘していく。

そのことの中にこそ「本当の水辺の時間」はあるのだと思っています。

かつての農民たちも内容は違っても同じことをやっていたはずなのです。つまりかつてはそれこそ大雨が降ればいつでも氾濫する川があって、そこら中に大きな湿地帯があって生活するのも大変だったような越後平野がありました。

その様な地域で絶えず色々な矛盾と対峙しながら、一歩ずつ堤防や水路を造ったりして、川を自分達の生きる世界の川に作りかえていったのです。

この矛盾と付き合う姿勢がかつての穀倉地帯の越後平野を作っていきました。彼らだってある一つの方法を使ってすっきりと解決させした訳ではありません。

長い時間をかけて、これをやったらこっちが逆にまずくなる。その様なことを繰り返しながら悪戦苦闘の末に終に出来上がったのが信濃川という川だったと思った方がよいでしょう。

私達もまたこうすればいいという簡単な話ではなく、むしろ私達自身も川の時間を農民から奪った一人でもあるし、そのことを絶えず感じながら川と向き合っていくことが大切です。

その歴史こそが本来水辺の時間を取り返していくということに繋がっていくのではないかなという気がします。

大変まとまらない話で恐縮ですが、ご拝聴ありがとうございました。

（編集：杉山泰彦）

report 03

「あさひ共同作業所」リニューアル・オープン

平成 19 年 11 月 17 日、新潟市東区小金町にろう重複障害者のための授産施設「あさひ共同作業所」が移転開所しました。聴覚障害のほかに肢体・視覚・知的などの複数の障害を併せつ人たちのための新潟県で最初の作業所として、平成 10 年、同じく東区上木戸に開所され来年の春で 10 年目を迎えます。上木戸地区の市道拡張のために移転を余儀なくされ、この度、小金町の私の私有地に増改築された真新しい施設 (写真) で生まれ変わることになりました。

新たな価値観の創造が期待されるあさひ共同作業所

少し、聴覚障害者を巡る社会的な環境について説明します。聴覚障害者に対する教育の原則的な方針は「聴覚口話法」と呼ばれる方法です。誤解を恐れずに端的に言うと、障害者自身の耳には決して、またはわずかしか届かない健聴者の話し声と同じものを、聴覚障害者に補聴器又は人工内耳を用いて発声することを求める方法です。手話または指文字などのコミュニケーション法はあくまで補助的なものとされています。ろう学校で「この子の口話はピカイチ」と折り紙をつけられ、自信を持って就職した卒業生が、数日を経ずに実社会の厳しさに直面するというのが、毎年繰り返されている現実です。それでも、何とか就職や居場所を見つけられる卒業生は幸いで、聴覚障害と肢体障害または知的障害などという重複の場合は、家族の日常的な保護がなければ就職はもとより、どこに行くこともできず、家に閉じこもるというケースが多いのです。障害者のための授産施設も手話などの支援体制がない場合がほとんどで、家族のろう重複障害者のための授産施設に対する希求は切実でした。(全国で最初のろう重複障害者のための授産施設開所までの経過は、コミックス作家山本おさむ氏の作品「どんぐりの家」で紹介されアニメ映画にもなって各地の同志に勇気と支援の輪を与えてくれました。) 平成 9 年に新潟で初めて行われた映画「どんぐりの家」自主上映会を通じて広がった支援の輪を支えとして「あさひ共同作業所」が翌年スタートしました。現在は 11 人の利用者と 4 人の常勤非常勤の職員が資源回収やいろいろな製品作りに取り組んでいます。

授産事業による利用者への分配額は障害の程度や作業所の規模などに左右されますが、きわめて少額で自立生活への道は遠いのです。さらに、そのわずかな収入の中から施設の利用料を支払うことを強要する法律が施行されていて、収入の減少も問題ですが、施設に通って作業に従事したり、人とふれあうことを貴重な楽しみとしている障害者が施設に通いづらくなっている事実もあるのです。

一方で授産施設の収益の増加を図る努力はもちろん必要です。私が着目したのは、樹木や竹の間伐材を原料とする割り箸製造です。割り箸は低価格のものも高級品も実は現在は国内での生産がほぼ途絶えています。ほとんどは中国などからの輸入に頼っている現状です。ただ、生産国の中国で乾燥工程での有害な薬品の使用問題や、原料となる材木などを、森を全部刈り取ってしまう皆伐方式で調達するなどの環境問題が表面化し、輸入国の責任も無視できなくなっています。(割り箸論争に関しては、東京大学の学生サークル環境三四郎による研究に教えてもらいました。) 環境や健康に対する配慮への政策的な支援の可能性も含めて事業としての可能性を研究してみる価値があると思っています。新潟市の食のまちづくりにも貢献できる道があるのではないでしょうか。

さらに、水辺の会とも交流のある (大熊先生、相楽さんは役員を務めている)「魚沼伝習館」の森づくり事業、特に粟島の里山や沢の復活事業との連携には夢を膨らませています。

この拙文にふれた皆様からのご教示を心よりお待ちしています。

世話人　浅井 敬一

新潟水辺イベント情報　新潟水辺の会 & 関連団体ほか

12 月 15 日 (土)
新潟水俣病市民フォーラム
テーマ : 阿賀に学ぶ－地域の融和と再生をめざして－
時間 :14:00 ～ 16:30
会場 : 新潟市市民芸術文化会館 (りゅーとぴあ)
内容
基調講演 : 緒方正人「生国に命をもやう」
パネルディスカッション :「阿賀の再生－水俣病が伝えたことー」
コーディネーター : 北川フラム
パネリスト : 竹下景子・森達也・大熊孝・篠田昭
オブザーバー : 緒方正人
問合せ : 新潟市コールセンター 025-243-4894

1 月 13 日 (日)
「信濃川水無しサミット」
時間 :14:00 ～ 17:00
会場 : 十日町市内
主催 : 十日町市

3 月 1 日 (土)
大熊孝先生最終講義および退職祝賀会
時間 :14:00 ～ 19:30
会場 : 新潟グランドホテル
内容
14:00 ビデオ上映
15:00 最終講義「川のあり方と水辺のまちづくり－技術の普遍性と地域性－」聴講自由
17:30 祝賀会 会費 1 万円程度 (事前申込み必要)
(水辺の会会員には事前に案内を送ります)
問合せ : 森本 090-1613-1879

3 月 8 日 (土) か 9 日 (日)
サケ稚魚放流
信濃川、千曲川の沿川各所
水辺シンポジウム
会場 : 十日町市内
時間及び内容は未定

小船井記念誌編集長奮戦中 !?　【執筆者に 20 周年誌原稿依頼中】

現在、元朝日新聞記者で「ばらくて」編集長の小船井 20 周年記念誌編集長から執筆予定者に原稿依頼中です。10・24 の世話人会で確認した記念誌は、A4 パートカラー 28 ページで 1000 部程度、08 年 3 月 1 日大熊孝新潟大教授の「最終講義および退職祝賀会」の機会に水辺価格で販売予定です。

記念誌の構成案です。1 会の紹介、2 記念シンポの鼎談、3 水辺の会の歩み / 年譜、エポック、9.22 シンポ報告、二つの映画『柳川掘割物語』『阿賀に生きる』、鳥屋野潟キャンペーン、水郷水都全国会議新潟大会、「ばらくて 8 号」、水辺の旅、水辺の会が紹介された新聞・本・雑誌・映像、旗・グッズ・アイコン等、4 水辺の会に集う人々 / 水質調査、掘割再生、栗の木川桜祭り、つうくり、トゲソの会、佐潟、ウォーターシャトル、萬代橋、日本海カヌー横断、新潟の水辺賞、NET ボート、5 水辺を物語り、伝え、記憶する / 水辺地蔵、他門川再生、鮭の環境放流、通船川川掃除船、子ども環境会議、舟の走る川、福祉の川辺、6 川絵師が描く新潟大地の水辺像、7 国内外からのメッセージ。原稿については、一本 800 字程度でお願いしています。その他のメッセージ・コメントも 200 字程度の短いもので依頼しています。

世話人　相楽　治

編集後記

開港 5 都市景観まちづくり会議新潟大会の運営を手伝いました。その中で、萬代橋、信濃川『新潟港の歴史と現在」というテーマで分科会が行われ、萬代橋東詰のマンション建設などについて活発な議論が交わされました。マンション問題では先輩格の横浜や神戸から貴重な意見を頂きました。反対している人だけでなく、地域の住民がしっかりした組織をつくり、業者が交渉せざるを得ない状況を作る事。行政も積極的に情報開示する事など。信濃川景観をどう作るのかは新潟のまちをどう作るのかという事です。住民、団体、企業、行政が同じ土俵で話し合える環境が必要です。

3 月 1 日は新潟グランドホテルで大熊孝先生最終講義および退職祝賀会が行われます。同日、新潟水辺の会 20 周年記念誌が出版されます。ユニークな編集長が作っていますので、すばらしい本になる事を期待しています。

編集人 : 森本利

●事務局からのお願い
インターネットメールで随時会員の皆さんに情報をお届けしています。メールアドレスを新しく持った方、アドレスを変更された方は事務局まで御一報ください。

●発行：特定非営利活動法人 新潟水辺の会
●事務局：新潟市西区みずき野 4-7-15 大熊　孝方
Phone 025-264-3191
Fax 025-264-3280
ホームページ
http://www17.plala.or.jp/mizubenokai/
メール　mizubenokai@plum.plala.or.jp